

年頭に際し國民に檄す

陸軍大將 田 中 國 重

二八

回顧すれば帝國の昭和七年は内外實に多事多端を極め、其光景は宛然波瀾重疊の觀を呈せり。即外に在つては國際聯盟と一騎打の活劇を演じ、國民の意氣は軒昂として冲天の慨を示し、横暴なる諸外國をして全く顔色なからしめ、内にあつては愛國の念燃ゆるが如き熱血男兒の一喝は全國を震撼したり。是れ我邦の外交及政治史上稀に見る事態なりとす。而して其副産物として生れたる現内閣は學國一致の看板を掲げつゝも、其支柱たる政民兩黨は互に軋轢し、閣員の結束は亂れ、爲に經營施設として見るべきものなく、國民最初の期待の全然裏切られたるは實に痛歎に堪へず。

現下の時局に對し國民の熱望措く能はざる所のものは、披山蓋世の勇氣と、果敢斷行の鐵腕とを有する一大政治家の出現其ものなり、區々たる法理や慣例や情實等に拘泥し、或は議會の一舉一動に腐心焦慮するが如き小心翼翼たる怯懦なる政治家に非常時局の重大使命を託して濟國救民の實を擧げんとするは、恰も木に縁つて魚を求むるに異ならず。宜しく堂々正義の旗幟を陣頭に翻し其所信に勇往邁進すべきなり。若し夫れ征戰の進路を遮る

者に對しては其政黨たると何者たるとを問はず鐵袖一觸の慨を以て望めば足れりとす。

凡そ外交には強力なる陸海軍の背景を必要とすることは、我松岡全權の一言一句が聯盟に於て大に重きをなしたつゝあるの事實に徴して明なり。人若し同全權をして名をなきしめたる原因を彼の雄辯に歸する者ありとせば大なる錯覺なり。凡そ外交舞臺に在ては國力の背景なき雄辯は講談師の儂舌と何等擇む所なきは彼支那全權顧維鈞の憐むべき境遇に徴しても思ひ半ばに過ぐるものあり。殷鑑速からず吾人は我邦の歐米心酔の徒輩に向つて猛省を促し、從來の亡國的主義より蟬脱せんことを勸告せんとす。況んや吾人は滿洲國を襁褓に擁するに於ておや、日本國民の對世界的地位と國防の負擔とは層一層其重きを加へつゝあるにあらずや。

今遠く眼をジュネーブに馳すれば、國際聯盟は日本の決意の意外に鞏固なるに辟易し、責任轉嫁の醜態を演じつゝ閉幕迎年するの己むを得ざるに至れり。將來帝國の聯盟脱退となるか、或は我政府當局の軟化となるか、否らざれば聯盟の叩頭讓歩を見るか、三者其一に出づるにあらざれば帝國と聯盟との紛争は永久に落着するの望なきに係らず、田舎芝居と何等擇む所なき聯盟劇に後頭するは其愚も又甚し。帝國は宜しく襁褓に在る可憐なる滿洲の撫育に全力を傾注して其健全なる成長を計るべし。此俯仰天地に愧ぢざる人道的鴻業は經濟封鎖又は武力干涉の如き暴舉に依つて阻止せらるべきものにあらず。又吾人は毫も之を恐るゝものにあらず。其實行は聯盟の自由裁量に放任して可なり。吾人には自ら對策あり、語に曰く斷じて行へば鬼神も之を避くと、吾人の進むべき途は其金言を實行するのにあるのみ。加之滿洲に於ける完全なる治安の維持は排日の巨頭たる張學良、蔣介石の徒

二九